「原理に関する成熟した応用可能な理解を持つ指導者の教育と育成
—肉心の機能及び堕落性と相関する心身統一についての再定義」—

マイケル・ヘントリック
清心神学大学院博士課程、韓国/米国

I. 前提
II. 問題
III. 統合
IV. 堕落性への架け橋
V. 霊的な影響への架け橋
VI. 肉心と永遠の生命
VII. 解決
VIII. 天一国指導者の教育と育成

I. 前提

統一原理の教育を受け、天一国を実際の現実として創建する能力のある指導者の教育は困難な課題である。あまりにも頻繁に採用されている教育方法論は、原理講論の概念とテキストを説明することに大部分を依存している。現場での伝道に関して言えば、実践もまた指導者養成の不可欠の部分である。しかしながら、統一文化の中にいる多くの指導者は単に教育不足であるだけでなく、統一原理と統一思想の最も根本的な面のいくつかについて、応用ができ実行可能で成熟した理解を欠いているように見える。そのような面の一つが、「心身統一」及びそれと人間の堕落性との関係の意味についてである。この論文の主題は、統一運動の現在及び将来の指導者のためのより改良された教育について、より成熟した理解だけでなく、より有益で実用的な理解を提供することを希望しつつ、探求しようとすることである。

原理講論では、人間の文字通りの心と体について、十分に統合された不可分の存在として三ヶ所で説明している。[1] テキストには次のように書かれている。「体のあらゆる部分が心の微妙な指示に対応して動くように」、「体は心との関係を離れては行動できない」、そして、「体は心の実体的な対象であり、心に似ており、心と一つになって行動する」。しかし、残念ながら、多くの統一主義者の間では、「心身の統一」という表現は、人間の文字通りの「骨肉」とそれとはどういうわけか結合していない思考する心との間の相互関係の質のことであると、あたかも骨肉がまさにそれ自体の心と意思を持っているかのように認識する共通の信条のままである。それで論理的には、このことが少なくとも部分的には不誠実、不一致、偽善、社会的な効果のなさなどの原因であると普通一般的には認識されている。

例えば、心と体の間の相関関係が貧しければ、行動は心の真摯な気持ちを十分には表現しないかもしれないと一般的に信じられている。同様に、心と体の間の相関関係が貧しければ、その

心と体は、今日は心の欲望に十分に一致して行動するかもしれないが、明日は一貫しない行動を表すかも知れない。彼らは利他主義について語るかもしれないが、非常に自己中心的に生きるかもしれないのである。次に、これらの三つのシナリオのいずれか又はすべてがある社会的状況の中で演じられるとき、それらは社会的には効果なしという結果となることがある。しばしば信心深い人々の高まいな社会的な約束がより乏しい社会的影響しかないのを比較して見られるようにである。

統一原理に基づく統一思想は、人間における心身の統一に関する明確な説明を提供している。[2] それによると、人間の生心と肉心の関係を通して、（生心に指示される）霊人体と（肉心に指示される肉身）がお互いに調和し、共鳴することができるというのである。生心と肉心は両方とも人間の自然な心の二つの面である。人間の骨肉は現実にはそれら自体の分離した「心」を持たないという――常識とも一致する見解――を認めることは一つの大きな進歩である。しかしながら、心と体の統一に関するその役割に大きく影響する「肉心」の現在の定義と理解には依然としてもう一つの深刻なずれが残っていることを私は示唆するものである。

統一思想によると、「肉心は個人と氏族を維持するための本能が制御され、日常生活ないし性への人間の関心が位置している心の部分である」。[3] 次の文節には、これらの「日常生活」の事柄には「衣食住」が含まれる、と述べられている。[4] 統一思想の別の文節では次のように述べられている。「第三の見解は、人間を霊肉の二重性を持つ存在であるとみなすものであるが、霊人体が性相であり、すべての物質的側面は形状に属する。従ってこの場合、生心は性相であり、肉心は形状に属する。」[5] かくして、肉心の関心事は「自分」にとって価値があり、重要なことにあると言うのは公正であるように思われるだろう。 どのような仕方で氏族が肉心のその他の特定の関心事に関係しているかは、「日常生活」が営まれる氏族の社会的状況の中での個人的な安心感によるものでなければ、明確ではない。

「統一思想要綱」でも、そのことは同じように述べられている。「生心と肉心の統一とは真善美の生活を送ることを優先し、衣食住の生活を二義的なものとする生き方を言う。しかし、堕落によって、人間は肉心が生心を支配する自己中心的で物質的な生活を送るようになってしまい、人間のすべての苦痛、苦しみ、および不幸が生じたのはこのためである。」[6] 「自己中心的で物質的な生活」と「衣食住の生活」に言及していることは、ここでも肉心の焦点が「自己」の物質的な関心事にあるという理解であることを示している。

対照的に、生心は「自己を超えた」ものに一般的に関心があるように思われるであろう。「自己を超えた」関心事には、「真善美」だけでなく、神と徳を追求する他者のための誠実で真なる同情や、自己中心の思想や情によって動機づけられていなければ、探求したい、創造したい、支えたい、激励したい、もてなしたい等の願望も含まれるであろう。かくして、これら二つの心とそれらに関連した関心事（「自己を超えた」関心事と 「自己」の関心事）を調和することが、いかなる人の人生においても明らかに最高に重要なことであるだろう。

II. 問題

心身の統一は、たとえ人間の堕落がなかったとしても、依然として人間に要求されることであったであろうということは理解される。それは人間が完全性にいたる過程の必要不可欠の部分である。しかしながら、文師の教えによると、堕落は別として、人間の心身の統一は、心情と良心の発達とともに自動的かつ同時に行われたであろう。[7]

しかしながら、上で述べたように、統一思想における心身統一に関する現在の説明を聞くと、堕落人間が苦しむのは、第一に心身統一の欠如のためであり、第二に罪と堕落性の故であるのか、または、第一に罪と堕落性の故であり、第二に心身統一の欠如の故であるのか、疑問に思うことになる。これら二つの間に関係がるとすれば、その関係は何であるのか? それらはお互いにどのように相互作用するのか? 心身の不統一で苦しむが故に我々に堕落性があるのか、あるいはその反対なのか?

文師は心身を統一する唯一の方法は真の愛を通してである、と何度も言われた。[8]
対照的に、文師は、堕落性を取り除くかまたは解決するには、カイン-アベル関係[9]の訓練、悪霊の除去、犠牲と公的奉仕の生活を送ることなど、いくつかのメカニズムによって達成することができると教えた。それ故、心身の統一と堕落性は、お互いに何らかの相互関係を持っているのかもしれない人間の内的性質の明確に別々の面であるのか? 肉心は専ら人間の物質的な必要と快適さにのみ関心があるのか、それとも、物質をはるかに超えて、人間の内的な幸福、すなわち、自己の内的な関心事に至るその他の「自己の関心事」をも包含するのであろうか?

III. 統合

私は、肉心とは、「自己の関心事」であると普通考えられている外的、物質的な必要なものや安らぎを与えてくれるものにまさに焦点を当てている部分の心であるが、しかしまた、「自己の関心事」である内的、心理的、情的、精神的な安らぎを与えてくれるものにも焦点を当てているものと推測する。「個人的な安らぎを与えてくれるもの」の私たちの定義を「衣食住」に対する「日常生活」の関心事のような物理的または生物的な快適を与えてくれるものやアイスクリームの自分の好みの味、好みの果実や野菜、家のサイズ、衣服のスタイル、または化粧品のブランドだけでなく、内的な安らぎを与えてくれるものも含むように拡大するとき、それは人間存在のほとんどあらゆる領域と遠く離れたものにまで至るであろう。まさに、つまるところ、生心は全体目的に関連しそれに奉仕するのに対して、肉心とは自己または個人の目的に関連しそれに奉仕する面の生心と見ることができる。[10]

このような関係において、生心と肉心は両方が、同時に人間の経験するあらゆる体験、考え、気持ちと相互作用し、異なる観点からではあるが、それらを評価するのかもしれないのである。かくして、文師が言われたように、「エデンでの堕落がなかったなら、心身は分かれていなかったであろう」。[11] 生心は体験、考え、気持ちを「自己を超えた」関心事の観点から評価するが、肉心

は同じ体験、考え、気持ちを「自己の」関心事の観点から評価する。これが堕落人間の心と堕落性の相互関係に対応するのに欠けている大きな架け橋である、と私は考える。

「内的、心理的、情的、精神的な安らぎを与えてくれるもの」とは何を意味するであろうか？ これらのいくつかを表す一般的な表現には以下のようなものがあるであろう。

- 「私は黒人の周りでは安楽になれない。」
- 「私は妊娠しているこの赤ん坊を生みたくない。自分の生活にはその余裕がないし、その子に対する心もない。」
- 「私は大勢の人の中では居心地が悪い。」
- 「私は『ノー』と言われることに耐えられない。」。
- 「私は制限速度で運転することに我慢できない。遅過ぎるから。」
- 「私には次から次へとボーイフレンドができ、それぞれと親密になった。なぜなら、それが罪であることは知っていても、私には必要なことだから。」
- 「私は隣人がどう思おうと、昼夜を問わずいつも大きな音をたてて音楽を演奏する。なぜなら、そうすることで気持ちが良いから。」
- 「私は人生でうまくいかないことについてすべて他人を責める。何故なら、私は何事においても自分が悪いのだと思って生きることができないから。」
- 「私は自分の人生では（自分の信仰を証しすることを含めて）正しい議論や立場を避ける。何故なら、論争や個人的な拒絶を取り扱うことができないから。」
- 「私は容易に調和しない人々を避ける。彼らは私をいらいらさせるし、私はそう言う人々の周りにいると不愉快だ。」
- 「私は夫と離婚した。何故なら、彼には私が慣れることのできない習慣があったから。」
- 「私はいつも人生で最も容易な道を探す。他のものにきつい仕事は他人にさせなさい。私はただなんとかやっていく。」
- 「私は、他の宗教を信じている人々と話すのを避ける。何故なら、私は自分が混乱するようになると恐れるし、自分が正しいのを知っているから。」
- "It would feel so good to get revenge on the people who cheated me."
- 「私をだました人々に復習するのはとても気分が良いだろう」。」

これらは内的、心理的、情的、精神的な安らぎを求める人間の願望から生じるかもしれない日常生活からのいくつかのあり得る例にすぎない。各々のありふれた表現が「自己を超えた」事柄と対立する「自己」の事柄に関係している。したがって、それらは人間の生心に対立する肉心の表現であると私は推測する。このように、内的、心理的、情的、精神的な安らぎを肉心の機能の正式な範疇と考えることなくしては、私たちは堕落性が堕落人間の心に入ってきて、働く大きな出入り口を事実上、見落としているのである。

もちろん、その他多くの内的要因を衣食住と性以外に肉心が関心あるもののリストに追加することができるし、追加すべきであるとすでに認められているかもしれないが、欠如している範疇の

全てを肉心の機能の定義に含む必要があることをここに提案する次第である。そうすれば、人間の完全性と復帰のプロセスの双方を心身統一の説明に統合するのに役立つであろう。その欠如している範疇とは、「内的、心理的、情的、精神的な安らぎを与えてくれるもの」である。肉心の関心事の領域にこの範疇を加えれば、人間の完成及び復帰のプロセスを心身統一と統合するのに役立つのである。

IV. 堕落性への架け橋

我々が理解できるできるように、内的、心理的、情的、精神的な安らぎを与えてくれるものをも肉心の属性とするこの架け橋は、堕落性の流入のための巨大な直接の出入り口を開くことになる。そうでないと、この巨大な直接の出入り口が無ければ、従来の思想は心身統一の欠如の結果として効果の無さ、一貫性の無さ、および偽善を単に提供するだけである。堕落性の四つの主要な特性をがひとつずつ見てみよう。[12]

堕落性の第一の特性、すなわち、神の観点から見ないこと、は、基本的なもので、その他の堕落性のすべての土台である。神の観点から見ないことは感覚的認識と推理を処理する能力の基礎として真の愛を持たないことと不可分である。神の本質は真の愛であるので、神の観点は真の愛の観点である。堕落人間は人生を自己中心の観点から経験し、しばしば他人を犠牲にして自分を見る。単純化しすぎる誘惑に駆られるものではあるが、この論文の目的のためには、この単純な定義が議論のためには十分であろうというのが私の希望である。もし肉心が自己の関心事に焦点を当てており、これには特に外的、物理的な関心事だけではなく、内的、心理的、情的、精神的な安らぎを与えてくれるものも含まれるとすれば、これが第一の堕落性の「デジタル・サーバー」ないし、「プラットホーム」であることは明白である。肉心は第一の堕落性が推理と認識を自己中心的に処理せよという要求に基づいてアクセスするプラットホームになるだろう。何故か? 何故なら、快適であることは自己の利益であるので、安らぎを与えてくれるものを外的、物理的、物質的にのみならず、内的、心理的、情的、精神的にも求めるものだからである。

二番目の堕落性の特性、すなわち、自己の位置を離れる傾向、は、基本的に第一の堕落性に基づいているが、それ自身でも成り立つものである。地上世界は、美徳と愛に関して人間の精神を成熟させるための、より大きくて広い子宮であり、訓練場である。したがって、もろもろの状況の故に、人々がしばしば不快な立場に置かれる結果となることがある。人々がそのような不快な状況をいかに解決するかが、忍耐、謙遜、尊敬心、正直さ、寛容さなどの美徳を育てるか、または、自己の精神生活を短気、傲慢、不正直、不寛容、不平、否定、無責任などに落としめるかを決定する。そのような美徳の欠如は、もし肉心が衣食住などの外的、物質的なタイプの関心事にのみ焦点を当てているだけであるとすれば、心身統一の問題とはほとんど無関係であるかもしれない。しかし、もし肉心が内的、心理的、情的、精神的な性質の安らぎを与えてくれるものにも関係があるとすれば、自己の関心事に肉心の焦点を当てることは、その人が無責任であることを選んで自己の不快な立場を離れるか、それとも自己の原理的な良心に従い、そのプロセスで自己の美徳を育てるか否かを決めるにおいてこの場合にも決定的であろう。

三番目の堕落性、すなわち、主管性転倒、の特性もまた根本的には第一の堕落性に基づいているが、それ自身でも成り立つものである。この場合の議論も自己の位置を離れるという先の場合と同様である。美徳の欠如の故に、堕落人間はしばしばカインの役割、すなわち、簡単に言えば、他人の権威に従うことには大いなる不快感を感じるものである。これは物質的、外的な不愉快さではない。それは衣食住や性とは何ら関係がないかもしれない。しかし、もし肉心が内的、心理的、情的、精神的な性質の安らぎを与えてくれるものにも関心があるとすれば、肉心は、善なる有徳な主体に直面してさえ、幸福で有徳の対象になるための反逆、暴動、無能さの集結地と扇動者になるであろう。

最後に、第四の堕落性、すなわち、悪を繁殖する傾向、の特性も同様に根本的には第一の堕落性に基づいているが、それ自身でも成り立つものである。人はなぜ自分の不正行為に他のものを引き入れたいとする願望を感じるのだろうか? 自分の非原理的な良心を和らげ、自分がなしている悪事にもっと心地よくなるようにすること以外にはない。明らかに、これは外的、物質的なことではない。しかしながら、それは自己の関心事の中では重要なことであろう。堕落人間は悪を繁殖する。何故なら、外的のみならず内的にも、自己の関心事を含む安らぎを追求するからである。もし肉心が自己の関心事に焦点を合わせ、これに内的、心理的、情的、精神的な安らぎも含まれるとすれば、四番目の堕落性の顕現には肉心が関与するであろう。

これらの四つのシナリオのすべてにおいて、肉心の機能は我々が「心身統一」と呼ぶものと統合したものとなり、そこにおいては、肉心の行動と（自己を超えた関心事に焦点を合わせる）生心の行動は調和しなければならない。

V. 霊的な影響への架け橋

堕落性は内的、心理的、感情的、精神的な快楽を求める肉心の欲望を通して私たちの生活の中に入ってくる巨大な直接の出入り口を見つけるだけでなく、霊的な実体の影響もまたこの道を通ってそれらの必要な共通基盤を見つけることができる。私たちが統一原理から知っているように、霊的存在は、自分たちが関係し、共鳴し、共通基盤を持つために選択した地上人に引き付けられ、力を得ることができる。（再臨復活の章を参照のこと）逆に、そのような霊的存在は、相互作用する共通基盤を持つことを見出した地上人に力を与えることができる。先祖であれ、天使であれ、友好的であれ、非友好的であれ、地上人の肉心は、単に衣食住や性の分野よりもはるかに多くの共通基盤を提供するかもしれない。肉身をもった地上人はしばしば内的、心理的、情的、精神的な要素を通して霊的存在と共通基盤を造成することは一般的に理解されるが、これと肉心との統合は心身の統一に関連するとき、欠如している。内的、心理的、情的、霊的な不快感を物質的な人々と霊的存在のための共通基盤と考えるとき、自殺的傾向、人種的偏見、青少年犯罪から憎悪犯罪、恐怖心、恐怖症、さまざまな非化学的依存症などに至る大量の潜在的な共通基盤が現れる。それは、霊界にいる人々と天使たちが肉心に関連した物と共通基盤を造成して

いることを意味するであろう。それは単に、霊人たちには自分自身の肉体がないためだけであろうか、または異なる理由のためであろうか？

VI. 肉心と永遠の生命

もし肉心は自己の関心事に焦点を当てるものであり、自己の関心事には内的、心理的、情的、精神的な快楽も含まれるものとすれば、肉体が死ぬとき、肉心は必要でなくなり、機能しなくなるであろうと信じる理由はない。死後の永遠の霊的な存在の中に、人は自己の精神的身体を保有する。統一思想が言うように、「この霊人体自体は性相と形状の属性を持つ個性真理体である。生心はその性相であり、霊人体はその形状である。」[13] 更に、より重要なことに、死後の霊人体は、自己の関心事たる安らぎを与えてくれるものを引き続き追求する。地上人の肉身に関連した安らぎを与えてくれるものは、死後の霊界においては、思いや願いによってより容易にアクセスしやすいかも知れないことは一般的に理解されるが、そのような衣食住などの快適さを求める欲望は依然として持続するであろう。より重要なことに、もし心理的、情的、あるいは精神的な性質の内的な安らぎを与えてくれるものを肉体の死後も霊人が追求するとすれば、霊人の肉心の行動はそれらの関心事に対応する手段として、肉体の死後も霊人にとって重要であり続けるであろうし、心身の統一は人の肉体の死後でさえも、人間の完成にとって重要であり続けるであろう。

もし生心と肉心の両方が人間の永遠の自然な心の側面であるとすれば、これらの側面の一つが肉体の死とともに消滅するであろうと考える理由はない。もし肉心が肉体の死とともに消滅することなく、人間の永遠の霊の一側面として人間の永遠な自然の心の中に住んでいるとすれば、肉心の永遠の相棒たる生心との円満でバランスのとれた機能は、重要であり永遠に継続するはずである。したがって、永遠の生心と永遠の肉心の間には、人間の永遠の自然の心と永遠の霊体として相互に関連し導く心身の統一があるはずである。

これは文師が、霊界は堕落人間の文化的な偏見や人種差別やナショナリズムなどの偏見によって歴史的に区分化されてきたと教えられたまさにその理由であろう。[14] 文師は霊界の仏教徒の分野、キリスト教徒の分野など、各分野に別々に住んでいる霊人たちが、各自の宗教的、文化的な偏見の故に。他の分野に住んでいる霊人たちと関係を持ちたくないとしている状態について述べられた。これは自己の関心事である心理的、情的、精神的な個人的安らぎを求める欲望の好例である。かくして、統一運動は国際的、異文化間の祝福結婚式を霊界と地上界で行って、そのような偏見に基づいて機能している堕落した霊人たちの安楽さを追求する肉心のマイナス的な影響を正すのに貢献しているのである。

VII. 解決

私は心身統一と堕落性との相互関係[15]（及び統一思想における人間の性質を定義する他の関連分野においても）については、人間の肉心の定義及び/または理解を改定する必要があることを提案する。肉心の定義及び/または理解は、衣食住と性を含む外的な自己の物質的な快

適さと幸福と共に、内的自己の内的、心理的、情的、精神的な安らぎを与えてくれるものを加えた両方の関心事を包含するように作られるべきである。生心は「自己を超えた」関心事に焦点を当てた部分の人間の心のままで残る。すべての経験、思い、および気持ちは、両方の心によって評価され、処理される。そして各人はこれらの二つの心がどのように入力を知覚し、評価するかに基づいて自分の決定と選択をする。堕落人間においては、これら二つの心は調和することができない。何故なら、真の愛は肉心と生心のどちらかの評価の基礎ではないからである。信仰的で宗教心があり、信仰と断食や祈祷のような霊的規律を通して熱心に神と徳を求めている人々でさえ「自己の関心事」である内的、心理的、情的、精神的な安らぎを求めようとする肉心の動機に必ずしも影響を与えるものではないだろう。精神的な傲慢、独善、不寛容、閉鎖的な心などが、個人的な快適さを求める肉心の欲望によって依然として強く支えられ、神が抱擁するであろう信仰生活を送ろうとする人間の熱心な努力を曇らせることがありうる。

前述したように、文師は、心身を統一する唯一の方法は真の愛を通してであると繰り返して言われた。このことが実際にはどのように理解されるであろうか？ 心と体の関係における肉心の理解を私が提案したように修正すれば、このような統一が理解可能となる。文師は「真の愛は他者のための愛である。」と、言われた。[16] もし人間に真の愛があるなら、生心は「自己を超えた」関心事に焦点を当てているのであるから、真の愛の表現と体験のための理想的かつ一義的な器になるであろうことは明らかである。真摯な利他主義、寛大さ、愛国心、忠誠心、孝行心、信仰、真美善などが真の愛に基づいて動機づけられる生心の自然な表現であるだろう。問題はいつも、いかにして肉心が一義的に「自己」の関心事に焦点を当てているときに、生心と調和し、一体化することができるか、ということであってきた。今や私たちは、真の愛の心を基台として、個人的な快適さを追求する肉心は生心と平行して作用するであろうということを理解することができる。真の愛の心をもってすれば、心理的な快適さを求める人間の必要性は、自己よりもむしろ「他者」に基づいて、その評価をするであろう。「妻子が健康で平安であるから、私は平安である。」 真の愛の心があれば、人間の情的な快適さを求める人間の必要性も同じように、自己よりもむしろ「他者」に基づいて、評価するであろう。「あなたが私を攻撃し迫害しているとしても、私は快適である。何故なら、私はあなたを神の子として愛し、あなたの行動の背後にあなたの善良さを見るからである。」 真の愛の心があれば、精神的な快適さを求める人間の必要性も自己よりもむしろ「他者」に基づいて、評価するであろう。「神が私の願うように私の祈りに答えてくれないとしても、私は自分の周りの世界に神を非常に豊かに感じるので、神は愛の神であり、私がその息子であり、すべての人々は私の兄弟姉妹であるこをを知って、私は平安である。」

これらの内的な「自己の関心事」はすべて堕落性が現れる絶好の機会であるだろうが、真の愛を基台にすれば、それぞれが「自己を超えた」関心事に焦点を当てた生心と調和する。かくして、真の愛があれば、、文師が「心と体」と呼んで来られたものの統一と調和は、自然に生じるものとなる。したがって、文師はこのように言われた。「エデンの園での堕落がなかったなら、心身は分離しなかったであろう。」[17] 何故か？ 何故なら、真の愛がアダムとエバ、およびすべての子孫の中で発展するにつれて、生心と肉心の双方が連携して誠実にそして真に為に生きることに焦点を当てていたであろうからである。文師が今日私たちにそのようにしなさいと教えておられるように

である。これらの二つの心が同時に経験や気持ちを評価し分析するにつれて、それらは調和した結論に到達したであろう。分離はなかっただろう。文師の以下の言葉の中にこれを見ることができる。

「愛は心と体が共に完全に共鳴し、互いに合わさって進んでいこうとするのです。愛は一方にだけ行くのではありません。ですから、良心と肉心が完全に一つになって目的に向かい、その突進していく方向と共に愛は走るのです。ですから、心身の共鳴圏によって絶対的方向性を確実に備えた所には、愛があるというのです。従って、皆さんが喜ぶためには、肉心と良心が共鳴圏に立たなければなりません。共鳴圏に立たなければ、愛は生じないのです。ですから、皆さんの良心と肉心が永遠の共鳴圏に立っているかを重視しなければなりません。」(天聖経、p. 1325)

それらの双方が為に生きているとき、良心と肉心はただ一つの目的と方向性をもって前進するであろう。

これは統一思想の中で[18]、心と体を一つにする行為は、そのような公的心の生活スタイル、すなわち、真の愛を表現するメカニズムとして役に立つ、と述べられている説明とは対照的である。テキストには次のように書かれている。「例えば、人間の最高の目的は、全体または神の為に行動し、全体(神)に喜びを捧げることである。人間がこの目的を中心として、生心(性相)と肉心(形状)の間の授受作用を通して調和をつくり出すとき、あるいは、人間が他人(例えば、兄弟や友人)との授受作用を通して調和ある生活を営むとき、統一思想では、この調和を人間の価値の本質と見るのである。」

ここにおいて、生心と肉心の間の調和の創造は、他者のために生きる目的と機能からは分離している。上に提案されたモデルでは、真の愛の成熟が生心と肉心が調和する結果となる。何故なら、それらの両方が同じ愛によって動機づけられ、指示されるようになるからである。肉心は自己の関心事に焦点を合わせているとしても、他者のための愛によって動機づけられ、指示され、その愛の脈略の中で肉心はこれらの関心事に対処する。例えば、「私は空腹だけれども、自分の子供が食べるまでは食べることに関心がない。」「私の周りにいるそんなに多くの人々が苦しんでいるのを見るとき、私は快適な気持ちを感じることができない。」 これが心と体の一体化の表現であると私は信じる。

VIII. 天一国の指導者の教育と育成

文師は言われた。「心と体が対立している人々は天一国の市民であることはできない。」[19] また、彼は以下のように言われた。「各人は自己の心と体を統一しなければならない。私たちは、その状態に到達するように努力しなければならない。そのような統一を達成しない人は天国に入ることはできないだろう。」

かくして、もし我々が、心身統一の問題は骨肉と心の断絶にあると依然として信じている指導者を教育し、育てているとすれば、自分は心身の統一に成功したと主張する人が誰もいないことを不思議に思うべきではない。私たちは、心身の対立が本当はどういうことであるか、そして、文師が本当は何を意味していたのかについての混乱した、不正確な理解の上に活動するように彼らを教育していて、彼らがそれを解決するのを不可能にしているかもしれないのである。その結果は、人々の精神生活の停滞となり得るし、又、文師が言われたように、天一国の国民となる資格がある人や天国に入る人は誰もいないという結果になるであろう。それは指導者を訓練していることにはならないだろう。それは敗北を確実にすることであろう。

したがって、天一国と Vision 2020 年を確立するためには、成熟し、効果的な指導者と、個人の日常生活において実行可能な指導者教育と訓練が必要である。もし心身統一に関するもっと明確な理解と、文師が意味したことをより正確に伝え、実行可能で達成可能なことを教えるならば、私たちは生きている間に、個人レベルで天一国を実現する新たな望みを持つことができる。

文師は言われた。「あなたの心と体が一つに調和していないならば、統一教会に入ってからの信仰がいかに大いなるものであろうとも、天国に行くことはできない。何故なら、対立の場には影があるからであり、肉心の欲望が良心をくつがえすならば、左側に影を落とすであろう。」[21] 文師はこうも言われた。「神の愛の中心として、心と体が為に生きるように何度も努力するときに、一体化を創るのである。心が体に奉仕するのと同じく、体が心に奉仕するときに、一体化がなされる。」[22]

指導者の教育と育成への我々のアプローチを彼らが縦的な心で真摯にかつ心情的に為に生きるように努めるのみでなく、肉心でもまたそのように努めなければならないことを理解するように改訂しなければならないことは明らかであるように思われる。
良心**及び**肉心の双方を為に生きる愛する心になるようにするときに、我々は挫折した指導者の終わり無き行列をみることを止め、その代わりに効果的な指導者が現場で実質的な結果をもたらし、永遠の天国にふさわしい天一国の真に資格ある国民を育てるのを見始めるであろう。

Notes:

[1] *Exposition of the Divine Principle*, cf. pp 45, 167

[2] *Unification Thought*, p. 154-155

[3] Ibid p154

[4] Ibid p154

[5] _____

[6] *New Essentials of Unification Thought*, p.180

[7] *Cheon Seong Gyeong*, Book 10, Chapter 2, 29, p.1053

[8] Ibid, 23, p. 1051

[9] *Exposition of the Divine Principle*, cf. part II, sec 1

[10] *Unification Thought*, p. 31

[11] *Cheon Seong Gyeong*, Book 10, Chapter 2, 29, p. 1053.

[12] *Exposition of the Divine Principle*, p. 72

[13] *Unification Thought*, p. 38

[14] *Cheong Seon Gyeong* (1st ed.) Book 6, Ch.2. Sec.2.3. p. 885

[15] 堕落性の四つの特性のみでなく、堕落性全てを含んで。

[16] *Cheon Seong Gyeong*, Book 3, Chapter 1, 30, p. 269.

[17] *Cheon Seong Gyeong*, Book 10, Chapter 2, 29, p.1053

[18] *Unification Thought*, p. 217

[19] *Cheon Seong Gyeong*, Book 15, Chapter 4, p. 2305.

[20] *Cheon Seong Gyeong*, Book 15, Chapter 2, p. 2267.

[21] *Cheon Seong Gyeong*, Book 15, Chapter 4, p. 2317.

[22] *Cheon Seong Gyeong*, 2nd ed., Book 3, Chapter 3, No. 33, p. 342.

Bibliography:

Cheon Seong Gyeong, 1st Edition, Sunghwa Publishing Company, 2006

Cheon Seong Gyeong, 2nd Edition, FFWPU, 2014

Exposition of the Divine Principle, HSA-UWC, 2009

New Essentials of Unification Thought, Unification Thought Institute – Japan, 2005

Unification Thought, Unification Thought Institute – Japan, 1973